

【日薬学術大会から】

後発品を先発品に戻した事例の分析発表が相次ぐ

意外と多い「なんとなく先発品が良いから戻す」と言う患者

処方せん様式の再変更を受けて薬局での後発医薬品調剤が急増しているが、それに伴い何らかの理由から、後発品を先発品に戻すケースも増えている。第41回日本薬剤師会学術大会では、そんな事例の原因を分析する発表が相次いだ。

広島市に拠点を置く、すずらん薬局グループでは、処方せんに「後発品への変更可」欄が設けられた2006年4月以来、いったん後発品を調剤したものを先発品へと戻すことになった134事例について、変更の経緯や理由を調べた。それによると、変更の経緯は「患者から先発品に戻してほしいと言われた」例が最も多く、全体の4分の3を占めた（図1）。医師が処方せんを「変更不可」としたために先発品に戻ったケースは、2割弱にとどまった。

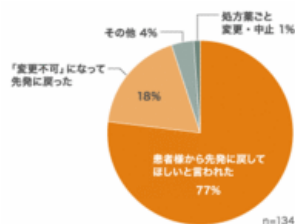


図1 後発品を中止した経緯（すずらん薬局）
※画像クリックで拡大します

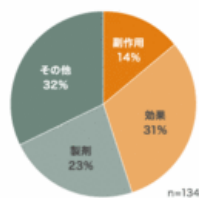


図2 後発品を中止した理由（すずらん薬局）
※画像クリックで拡大します

先発品に戻した理由は、「効果」に関するものが最多で31%（図2）。「効かなくなった」という訴えばかりでなく、「効き過ぎる」との訴えもあった。2位は「製剤」に関するもので23%。口腔内崩壊錠などで、使用感が変わることへの抵抗から先発品に戻した例が少なくなかったという。「副作用」に関するものは3位で14%。このほか、32%が「その他」に分類されているが、理由としては「なんとなく」が最も多かった。

今回の調査結果について、すずらん薬局グループ代表取締役の古屋憲次氏は、「後発品を先発品に戻すかどうかについては、患者さんのメンタルな部分が大きく影響する。最初以後発品を調剤する際、薬剤師が自信を持って薦められるかどうかが重要だ」と話している。

【日薬学術大会から】

後発品を先発品に戻した事例の分析発表が相次ぐ
意外と多い「なんとなく先発品が良いから戻す」と言う患者

一方、岐阜市を中心に東海、北陸、関西、四国地域に薬局を展開する、たんぼぼ薬局でも2006年4月以降、後発品を先発品に戻した事例についてその理由を調査した。その結果、先発品を後発品に変更した834件のうち、5.3%に相当する44件が先発品に戻っていたことが明らかになった。

先発品に戻った理由については、「効果に関するもの」14件、「製剤・包装などに関するもの」12件、「副作用に関するもの」11件、病院側の事情に関するもの3件—という結果だった

(図3)。中には、因果関係は不明ながら、後発品に変更した後に血糖値が上昇したり、不整脈が悪化して入院したケースもあったという。

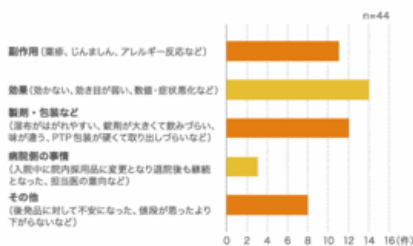


図3 後発品から先発品に戻した理由 (たんぼぼ薬局、複数回答)
※画像クリックで拡大します

これに対し、後発品が先発品に戻った事例を薬効分類別に分析したのが、福岡県北九州市のサンキュードラッグだ。同社の調査によると、先発品に戻した例は、中枢神経薬と消化器薬で群を抜いて多かった。

中枢神経薬を先発品に戻した19事例の理由としては、「眠気の持ち越し」

(6件)、「なんとなく先発が良い」

(5件)、「効果不十分」(4件)などが多かった(図4)。また、

消化器薬を先発品に戻した15例の

理由は、「なんとなく先発が良い」(8例)が圧倒的に多く、以下に「下痢傾向」(2件)、「飲み間違えそう」(2件)などが続いた(図5)。

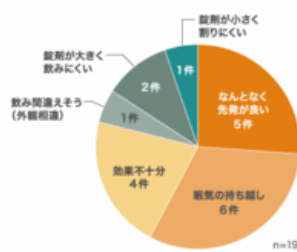


図4 中枢神経薬を後発品から先発品に戻した理由 (サンキュードラッグ)
※画像クリックで拡大します

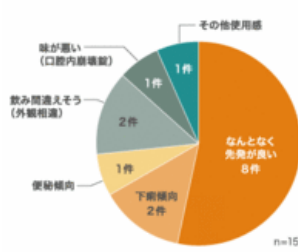


図5 消化器薬を後発品から先発品に戻した理由 (サンキュードラッグ)
※画像クリックで拡大します

いずれの調査結果も、全体の傾向を明確に示すほどの事例を集積しているわけではないが、後発品を先発品に戻すかどうかについては、後発品に対する患者の感覚的な印象が大きく影響していることを裏付ける結果といえそうだ。